

カフカの『ある犬の探究』（4）

—狩人犬との出会いとその後—

佐々木 博 康*

【要 旨】 本稿では、物語の末尾に登場する狩人犬のモデルを、かつてカフカと恋愛関係にあったミレナ・イエセンズカーと捉え、探究犬と狩人犬の奇妙な対話の意味を明らかにした。ここで表現されているのは、人との関わりから離れ、「書くこと」に専心してきたカフカが、ミレナとの出会いによって愛を経験し、それが糧となって生きる力を再び獲得する過程である。狩人犬との共同性の体験を経た探究犬が、音楽学の研究に向かうのは、音楽が人とのつながりと関わるものだからである。探究犬の研究の方向修正は、真実の追求ばかりに拘泥してきたカフカの生き方の修正を意味する。

【キーワード】 ミレナ 歌 権力への意志 愛 音楽

7. 狩人犬との出会い

これまでこの物語は一人称の語り手による「語り」で展開されてきた。ところが、狩人犬が登場する末尾の部分はもっぱら探究犬と狩人犬の直接話法による対話で示されている。つまり、それまでずっとディエゲーシス（物語における「語り」の部分）であったものが、狩人犬が登場する部分だけはミメシス（物語における「演劇的再現」の部分）となっている。これは『断食芸人』においても同様である。物語の最後に至ると語り手が背後に退き、断食芸人とサーカスの監督との対話が直接話法で示されている。一般に、ディエゲーシスはさまざまな出来事を短く縮めて効率的に報告する語りであるのに対して、ミメシスは現実をそのまま再現しようとするものである。従って現実と同じだけ時間がかかるが、読者に出来事が目の前で起きているかのような錯覚を与え、臨場感がある¹⁾。それゆえ、通常、作家は物語において重要な箇所ほどミメシスとして表現する。とすれば、『探究』の終わり近くの対話部分は、『断食芸人』の末尾と同様、それまでのディエゲーシスのすべてがそれに向けて語られてきたと言っても過言ではないほど、作者が重視している場面であるはずである。では、この部分は何を描いているのか。

まず、探究犬と狩人犬の関わりを大まかに振り返ってみよう。断食の果てに血を吐いて気を失ってしまった探究犬が再び意識を取り戻すと、目の前に一匹の「美しい犬」（476）がいる。この犬は自分を「狩人（Jäger）」であると言い、これから狩りをするので探究犬にその場を離

平成 29 年 5 月 31 日受理

*ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座（ドイツ文学）

れるように求める。探究犬は、体が弱っているので歩けないと言う。こうして探究犬と狩人犬との間で、立ち退きをめぐる議論が始まる。そのうち、狩人犬が「愛を交わそうとして」近づいてくる。探究犬は「恐怖」を感じ、「近寄らないでくれ」と叫ぶ。拒絶にもかかわらず、穏やかに「あなたは変な人ですね。私が気に入らないのですか」と応じる狩人犬に対して、探究犬はしだいに「欲求」を強めていく。立ち退きをめぐる両者のやりとりは続く。探究犬は「狩りをやめにしてください」と頼むが、狩人犬は「私は狩りをしなければなりません」(477)と譲らない。探究犬は、「私は立ち去らねばならない、あなたは狩りをしなければならぬ(……)しなければならぬばかりです。どうして私たちがしなければならぬのか、あなたはわかっているのですか」(477-8)と狩人犬に問う。すると狩人犬は、「でもそこにはわかる必要のあることは何もありません。それは自明で、自然な事柄です」と答える。探究犬はなおも迫及するが、結局、「あなたは本当に私がしなければならぬということがわからないのですか。この自明なことがわからないのですか」と押し切られてしまう。狩人犬のこの問い返しに、探究犬は黙る。狩人犬が「歌を歌い始めている」ことに気づいたからである。探究犬が「あなたは歌を歌うのですか」と言うと、狩人犬は「ええ(……)歌を歌います。すぐに。でもまだ歌ってはいません」(478)と答える。にもかかわらず、探究犬は、狩人犬から発せられた「旋律」が「空中に浮かび」、自分の方に向かってやってくるのを、そしてそれがただ自分だけに向けられたものであることを認識する。探究犬は、その旋律に「抵抗」できない。狩人犬の歌の旋律——「その気高さの前では森も沈黙」すると言われる——に呑み込まれてしまう。それまで「とても走れないな」と思っていたにもかかわらず、探究犬は「旋律に駆り立てられて」、いつのまにか、「なんともすばらしい跳躍をしながら、飛ぶように走って」いる。後になって、このときのことを振り返った探究犬は、「過敏だったため」であるとして、当時の認識を「すべて否定」する。しかし、それが「迷妄」であったとしても、「何かすばらしいものがある」という。というのも、それは、「完全な忘我において我々がどれほどのものに到達することができるかを示している」(479)からである。

ほとんど謎のような対話が続き、突然幻想的な描写が現れ、不可解な感想が語られる。ここではいったい何が表現されているのだろうか。人間のレベルからここでの状況を見るなら、探究犬が断食をしている場所でこれから猟が行われるところであると言える。「狩人(Jäger)」と名のる犬は、実際には狩りで人間に使われる「猟犬(Jagdhund)」であると考えられる。ただこの物語は、人間の姿が犬たちには見えないという設定で作られているので、この犬は自分のことを「狩人」と呼ぶ。犬自身が、自分は人間に使われて動いているのではなく主体的に狩りをしている存在であると思っているのである。対話において狩人犬は、「歌を歌います。すぐに」と言うが、この歌は狩りに際しての吠え声であるとみることもできよう。また、探究犬が聴く「耳を破裂させんばかり」(479)の「旋律」も、猟で獲物を追い立てるために鳴らされる角笛の音と解することができるかもしれない²⁾。しかし、それだけでは、音楽犬をサーカスの曲芸犬であると謎解きして終わることと同じく何の意味もない。問題は、探究犬と狩人犬の対話が何をめぐってなされているのかという点である。

結論を先取りして言えば、断食の末についに血を吐いてしまう探究犬は、結核のために咯血したカフカであり、探究犬の目の前に現れた「美しい犬」はカフカの女友達ミレナ・イエセンスカーである。つまり、探究犬と狩人犬の対話は、カフカとミレナの恋愛関係を凝縮して表現したものなのである。これについては別の論文で詳細に検討したので³⁾、伝記的事実との具体

的な関連についてはそれで確認してもらうこととし、ここでは物語内での意味に的を絞って見ていく。

まず、ここで登場するのが、なぜ狩人犬なのか、「狩り」にはどのような意味があるのかということから考えていこう。狩人犬は、『断食芸人』の末尾に登場する豹と共通するところがある。豹は主人公の断食芸人と対蹠的關係にある。断食芸人は断食し続けてやせ衰えていく。断食芸はすたれ、断食芸人が入っている檻の前で足を止める観客もいなくなってしまう。一方、豹はその「牙」によって「獲物」を引き裂き、「生肉」を食べる。「牙」には「自由」が宿っているようだと言われる。「生きる歓びがその口から灼熱の炎となってあふれてきた」⁴⁾と描写される。肉を食べることで生命力にあふれる豹には大勢の観客が群がる。

『探究』の狩人犬もまた、断食によって死にそうになっている探究犬とは正反対の存在である。狩人犬は、その職業が示しているように、狩りをして獲物を捕らえ、その肉を食べることで生きる存在である。また、「美しい犬」とされていることからわかるように、豹と同じように生命力に輝いている。さらに狩人犬は、ほとんど死にかけていた探究犬をその歌によって蘇らせる。すなわち、他者に生きる力を与える。『断食芸人』の豹がみずから生命力にあふれることで、観衆にも生命力を分け与えていたのと似ている。つまり、豹も狩人犬も、生を拒否して生きる断食芸人や探究犬とは対蹠的な、生そのものの象徴なのである。

カフカは生の本質を、ニーチェ的な意味での「権力への意志」と捉えている。この場合の「権力」は、単なる政治的な領域での権力だけを指すのではなく、日常生活における力関係をも含めたもっと広い意味での「権力」のことである。生はより強い権力、より強い力を求めて不断に上昇しようとするものであり、権力的な上昇を果たすためには、自分より下位の存在を自らの犠牲にすることが不可欠となる。カフカはこのことを、「牙＝齒」という武器をもって「狩り」を行うこと、そして「犠牲者の肉を食べること」と表現する。生の世界は弱肉強食の世界、強者の原理が支配する世界なのであり、より強力な「牙」を持つ者だけがこの世界を「自由」に生きることができるのである⁵⁾。『断食芸人』の豹の「牙」に「自由」が宿っていると言われるのはそのような意味である。権力意志に従って生きる強者は生命力にあふれており、周囲の人々から——男性の場合は女性たちから——畏敬をもって仰ぎ見られる。

このようにカフカは、野生の世界だけでなく人間の日常世界もまた弱肉強食の世界と捉え、それを生の必然とみなすのであるが、生にはもう一つの必然がある。それは生殖である。生命が生殖によって続いていく以上、人間にとって性行為は生命の存続のためには不可欠な行為である。カフカは生を権力衝動と性衝動の二つの側面を持ったものとして捉え、この両側面を表現する言葉として、「狩り」を使っているのである。そしてこの二つの衝動を満たすことを、カフカは「肉を食べる」という喩えで表現している。昨今の日本で流布している俗語に「肉食系」という言葉があり、性行為に対して積極的な人間を指す言葉となっているが、ここには以上のようなカフカの捉え方との共通性が見られる。カフカの物語の登場人物の中では、『失踪者』の主人公カールを誘惑する女中やブルネルダ、『訴訟』の廷丁の妻やレーニ、『城』のフリーダなどが性的な意味での弱肉強食性のイメージを体現する存在である。

カフカの文学は、このような権力性と性衝動の二面を有する生の弱肉強食性＝「狩り」との戦いの記録であると言える。カフカは「狩り」を、一方では生の必然として肯定する——『変身』のグレーテ⁶⁾や豹や狩人犬にその肯定的な面が現れている——と同時に、他方ではそれをどうしても是認することができず、自分の分身である主人公たち——グレゴールや断食芸人や

探究犬——の「断食」が示しているように、そこから徹底的に距離を取ろうとするのである。

『探究』に戻れば、狩人犬が「狩人」であるということが示しているのは、狩人犬が権力意志としての生の世界を生き抜いていく強さを持った存在であるということ、そしてまた、性的な積極性を併せ持っているということである。ただ、『断食芸人』の豹が生の弱肉強食性を明確に体現していたのに対して、狩人犬の場合は性的側面が前面に出ていると言える。

以上のことを念頭に、立ち退きをめぐる探究犬と狩人犬の言い合いを見てみよう。「食べること」をしない探究犬とは、弱肉強食としての生の世界を拒否し、「書くこと」で生の意味を探究しているカフカである。探究犬にとってその場を退くことは断食実験をやめることにつながるが、それはカフカにとっては「書くこと」をやめることを意味する。一方、狩人犬は「狩り」をすることを自分にとって当然のことと考えており、探究犬がどんなに言葉を尽くしてもそれをやめようとししない。ミレナは敢然と生の立場を主張する。立ち退きをめぐる探究犬と狩人犬の押し問答とはつまり、「書くこと」と「生きること」の対立の反映なのである。カフカとミレナとの出会いとは、生き方が大きく異なっており、本来交わるはずのない人間同士の出会いだったのである。

立ち退きをめぐる探究犬と狩人犬のやりとりが膠着状態に陥ると、狩人犬は突然、「愛を交わそうとして (liebend)」、「身を寄せて」くる。それに対して、探究犬は「恐怖 (Entsetzen)」を感じ、「近寄らないでくれ」と叫ぶ。狩人犬のこの接近はあまりにも唐突に思われるが、それはカフカがミレナとの半年以上にわたる恋愛を縮めて表現しているからである。狩人犬の身体的接近は、カフカとミレナの恋愛が身体的レベルに及ぼうとしたことを表している。狩人犬は性的積極性を有しているが、実際の両者の恋愛においてもミレナの方が積極的だった。そして探究犬の激しい拒否もまた、性行為に対するカフカの強い抵抗と一致している。

なぜカフカは性行為に対して強い抵抗を示すのだろうか。それは、生の本質が上位の存在による下位の存在の搾取に見えていたカフカには、性行為もまた、家父長制社会における男性による女性の搾取という、やはり権力性を伴ったものと捉えられていたからだと思われる。

探究犬の激しい拒絶にもかかわらず、狩人犬は穏やかに、「あなたは変な人ですね。私が気に入らないのですか」と応じる。そのような狩人犬に対して、探究犬は「ますます欲求を強めていく。カフカとミレナの関係が一段と深まっているのである。そして、立ち去る、立ち去らないで始まった議論は、より根本的な問題へと向かっていく。探究犬は狩人犬に問う。

「私は立ち去らねばならない、あなたは狩りをしなければならぬ」と私は言った、「しなければならぬばかりです。どうして私たちがしなければならぬのか、あなたはわかっているのですか。」(477-8)

奇妙な問いである。探究犬＝カフカは何を問題にしているのだろうか。まず、「しなければならぬ」について考えてみよう。世界にはさまざまな「しなければならぬ」がある。しかし、それはなぜ「しなければならぬ」のか。その根拠を問い続けてきたのが探究犬のこれまでの生き方である。他の犬たちは疑いを抱くこともなく、伝統や儀式などが要求する「しなければならぬ」に従って生きている。だが、探究犬はそうではない。納得できないことに唯々諾々と従うことができない。世界に充満する「しなければならぬ」、つまり、「法＝掟」に違和感を覚える。探究犬は問わずにはいられない。問うことこそ、虚偽の世界を脱して真実に到達す

る道だと思って生きてきた。誰も問う必要性を感じないところでも、問うことでその虚偽性が露呈し、真実が見えてくると考えてきた。たとえ同胞の犬たちが、探究犬の問いに沈黙でしか応えてこなかったとしても、理性と論理で納得できるまでさまざまな問いを発し続けてきた。だからここでも、問うのである、なぜ「しなければならない」のかと。

では、何を「しなければならない」と言っているのか。上の引用をもう一度見てみよう。「私は立ち去らねばならない」ということと、「あなたは狩りをしなければならない」ということは対立ではなく、同一の事柄である。狩人犬が狩りをしなければならないので探究犬が立ち去らねばならないのだから。とすれば、ここでの根本的問題は、「狩りをしなければならないのはなぜなのか」ということになる。

すでに述べたように、「狩り」は権力衝動と性衝動の両方を意味している。つまり、「狩りをしなければならないのはなぜなのか」という問いは、生の必然の意味を問う問い、カフカにとって最大のアポリアの答えを求める問いなのである。狩人犬はミレナの分身なので、ここでは特に性の問題に重心がある。すなわち、「狩りをしなければならないのはなぜなのか」は、「人間同士の恋愛関係においてなぜ性行為が必要なのか」という問いに置き換えることができるのである。実際、カフカはミレナに、二人の関係においては性行為は必要ないのではないかと手紙で何度も訴えている。精神的な愛が肉体的な行為へと移行するのは当然であるとするミレナと、精神的な愛だけで十分であるとするカフカ、——二人の関係が破綻したのは、この問題に対する両者の考えのずれのゆえである。

「どうして私たちがしなければならないのか、あなたはわかっているのですか」という探究犬の切実な問いに対する狩人犬の答えは実にあっさりしたものである。

「いいえ」と犬は言った、「でもそこにはわかる必要のあることは何もありません。それは自明で、自然な事柄です。」（478）

この答えに満足できない探究犬は、いらだちながらさらに追及し、狩人犬の発言に見られる論理的矛盾を勢い込んで指摘する。しかし、狩人犬はそのような議論を一気に打ち切るように逆に問い返す。

「親愛なる小さな犬さん、あなたは本当に私がしなければならないということがわからないのですか。この自明なことがわからないのですか。」（478）

狩人犬のこの言葉は何を意味しているだろうか。探究犬に対するこれまでの狩人犬の態度を見てみよう。頑なな探究犬がどれだけ無愛想にその場を離れることを拒んでも、狩人犬はそれを気にせず、少しずつ近づいてくる。探究犬が、「私のことなどかまわないで下さい。他の犬たちも私のことはかまわないのです」と言っても、狩人犬は「あなたのために（立ち退くことを——引用者補足）お願いしているのです」と言う。探究犬が、「歩きたくても歩けないのです」と説明すると、「微笑みながら」、「だいじょうぶですよ（……）歩けます」と励ます。狩人犬が狩りが始まったら大変なことになると言い、探究犬から「そんなことは私が心配します」というにべもない返答しか戻ってこなかったときも、「それは私の心配でもあるのです」と、探究犬の「頑固さを悲しみながら」（476）言う。身を寄せていって「近寄らないでくれ」と激しく拒

絶されても、「私が気に入らないのですか」(477)と尋ねるだけである。

これらの簡潔な言葉のやりとりによってカフカが表現しているのは、孤独に閉じこもるカフカに対するミレナの粘り強いやさしさである。ミレナの周囲にいた人々が証言しているように、ミレナの特質の最大のものは、彼女が「与える人」だったところにある。友人のマルガレーテ・ブーバー＝ノイマンによれば、「彼女の指のすき間からお金（ここでは父親のお金）が流れていた。彼女は贈り物をし、必要とされるところ、喜ばれるところには、人目をひかないようにして与えたのである。」⁸⁾ 彼女が与えたのは金銭ばかりではない。ブーバー＝ノイマンが、「彼女にとって友情とは、すべてを相手に捧げ尽くすこと、相手のために自分を犠牲にすることと同義だった」⁹⁾、「彼女は、ミレナは、愛の人だった。(……)彼女の感情の強さは、心も体も精神もすべて愛に捧げ尽くす力を彼女に与えた」¹⁰⁾と述べているように、友情や愛情に関してもミレナは「与える人」だった。ミレナ自身、ブーバー＝ノイマンに、かつての恋人たちについて、「彼らに勇気を与えることがいつも私の役目だった」¹¹⁾と語っている。カフカは1920年7月12日付けのミレナ宛の手紙で、「生命を与える君の力」¹²⁾という表現を使っている。このようなミレナの性格は、カフカと別れた後の彼女の生き方、つまり、自らは危険も省みずプラハにとどまり続け、ナチスによって迫害された人々を亡命させるために尽力するという生き方ともつながっているだろう。

カフカは、1920年8月2日から3日にかけて書いたミレナ宛の手紙で、次のように述べている。

君は一つの特性を持っている——思うに、それは深く君の本質（Wesen）に根ざしている（……）——それは僕がまだ誰にも見出したことのない特性であって、それがここで見つかったにもかかわらず、本当にあるとは思えないような特性だ。それは、君が人を苦しませられない（nicht leiden machen）ということだ。たとえば同情するから苦しませられないのではなく、君ができないからできないということだ。¹³⁾

ミレナの「与える人」という特徴が、「人を苦しませられない」という彼女の「本質」から出ていると、カフカが考えていたことがわかる。

当時のミレナは、奔放な女性関係と自堕落な生活を繰り返す夫エルンスト・ボラックのために、身も心もぼろぼろの状態であった。にもかかわらず、彼女はカフカのために苦しんだ。彼女の友人ヴィリー・ハースがそのことを確認している。

そして彼女（＝ミレナ）は苦しんだ。彼女はきっと恐ろしいほど苦しんだだろう——それも、彼（＝カフカ）が苦しんでいたからである。¹⁴⁾

このようなミレナの特質の一端が、探究犬に対する狩人犬の粘り強いやさしさとして表現されているのである。

恋愛関係が深まっていくにつれて、カフカは自分にとって苦悩の源泉であり、最大のアポリアである生の必然の問題をミレナにぶつける。それが、「人間同士の関係においてなぜ性行為が必要なのか」という問いであり、そしてそれに対するミレナの答えが、「そこにはわかる必要のあることは何もありません。それは自明で、自然な事柄です」という言葉なのである。ここで

表明されているのは、単純だが力強いミレナの生き方の根本原理であり、彼女自身の「存在の本質」である。『断食芸人』の豹と同じく、生の必然をそのようなものとして受け入れているその自然さ、それは生の必然に煩悶するカフカとは対極にあるものである¹⁵⁾。

カフカはミレナの答えに満足せず、さらに議論を続けようとする。恋愛をしながらも、恋愛についての議論を継続する。あくまで理性と論理によって納得しなければならないのである。というより、カフカはどうしても性行為を受け入れられないのである。形式論理に拘泥する探究犬に対して言う狩人犬の、「あなたは本当に私がしなければならないということがわからないのですか。この自明なことがわからないのですか」という言葉は、議論をいっさい断ち切るもので、ほとんど怒りに近いものがある。精神的な愛が肉体的な行為につながることを当然と考えるミレナが、後者をあくまでも拒絶しようとするカフカに感情を爆発させたのである。だが、この感情の爆発はカフカへの強烈な愛があればこそのことである。ミレナの考えでは、「しなければならない」という思いに突き動かされるのは、愛のゆえである。このことをまったく感じとってくれず、形式的な議論を続けるカフカに対して、どうして理解してくれないのかと強く訴えているのである。

探究犬が狩人犬の歌を聴くのはそのときである。

というのも私は気づいたからだ。——そしてそのとき、新しい生命力が私を貫いた。恐怖（Schrecken）がもたらすような生命力が。——私は、ひょっとしたら私以外の誰も気づくことができなかった、とらえがたいささやかな事柄を通じて、その犬が胸の奥から一つの歌を歌い始めていることに気づいた。（478）

探究犬は狩人犬の言葉の背後にあるものを目に見える歌として受け取る。狩人犬から出て、空に浮かび、ただ探究犬だけをめざしてやってくる歌とは、我々の通常の言葉で言うなら、「愛」にほかならない。

私は当時、これまで私以前にいかなる犬も経験したことのない何かを認識したと思った。（……）私が認識したと思ったのはつまり、その犬が気づかないうちにもう歌っているということ、いやそればかりか、犬を離れた旋律が、それ自身の法則に従って、空中に浮かび、犬の上方を離れ、その犬とはまるで関係ないものであるかのように、私の方を、ただ私の方をめざしているということであった。（478f.）

この場面は、カフカが書いたすべてのものの中で唯一のロマンチックな恋愛場面である。それが通常の小説の恋愛シーンといかに異なったものであるにしてもである。カフカは、ミレナの「愛」をこのような「旋律」として聞き、まるで具体的な事物でもあるかのように目にしたのである。

この「旋律」は、子供の頃の探究犬が音楽犬たちのパフォーマンスから聴き取った「旋律」と同じ種類のものである。音楽犬たちの音楽は実際には演奏されておらず、パフォーマンスにすぎなかったが、探究犬がそれを音楽と受け取った。同じく、ここでの狩人犬も実際には歌を歌ってはいない。にもかかわらず、探究犬は歌を聴くのである。音楽犬たちから響いてくる「音楽」は、子供であった探究犬を圧倒し、翻弄するほどのすさまじい「騒音」とされていたが、

ここでも狩人犬の「旋律」は、「それはどんどん強まってきた。それはとどまるところを知らず、もう今はほとんど私の耳を破裂させんばかりであった」(479)と言われるように、探究犬に激しい作用を及ぼす。音楽犬たちの「音楽」は「暴力」とさえ感じられるものだったにもかかわらず、探究犬は「あらゆる音の充滿の向こうから」「本来の旋律」を聴き取り、すっかり魅了される。ここでの狩人犬の「旋律」も、探究犬の「耳を破裂させんばかり」であるにもかかわらず、「この声、その気高さの前では森も沈黙」するほどにすばらしいものであるとされている。

このように、『探究』の初めに語られる音楽犬体験と、末尾で示される狩人犬体験は同質の体験である。それらは物語全体を枠づけていると言える。では、これらの両体験はどのような意味で同質なのか。

音楽犬体験で表現されていたのは、カフカがイディッシュ語劇の俳優たちに「存在の本質」を見たということであった。自己の「存在の本質」をもっとも十全な形で表出して生きている姿を見たということであった。ここでの狩人犬体験においても同様のものがある。カフカはミレナとの関係において、彼女の「存在の本質」を強く感じたのである。それは、「そこにはわかる必要のあることは何もありません。それは自明で、自然な事柄です」という力強い断言に見られるミレナの自然さである。

狩人犬体験は音楽犬体験と同質の体験として表現されているが、違いもある。音楽犬たちの場合、探究犬は彼らの集団的パフォーマンスに感銘を受けるが、自身はまだ子供であり、彼らの共同体に加わることはできない。彼らに接近しようとするとはじき出されてしまう。「彼らに近づき、挨拶を交わそう」と思うが、「音楽が勢いを増し、文字通り私をひつつかまえ、この現実の小さな犬たちから引き離して」(429)しまう。「七匹の犬たちに同じ犬同士としての親近感を感じるやいなや、またしても彼らの音楽が始まり」、「あちらこちらに投げ飛ばされ」(430)る。「彼らは返事をしなかった。私がそこにいないかのように振る舞った」(431)のである。

しかし、狩人犬との関わりにおいては、探究犬は当事者として共同性に参加している。音楽犬体験の場合は、「我を忘れ (besinnungslos)」させることはあったが、基本的には離れたところから「観察 (Beobachtung)」するという立場にいたのに対して、狩人犬体験においては、探究犬は「完全な忘我 (Außer-sich-sein)」(479)に身を委ねる。

今日では私はもちろん、そのような認識はすべて否定するし、それは当時私が過敏だったためだと思っているが、それが迷妄であったとしても、その迷妄には何かすばらしいものがある。それは、私がこの世界における断食時代から救い出した唯一の現実である。たとえ見せかけのものであるにせよ。それは少なくとも、完全な忘我において我々がどれほどのものに到達することができるかを示している。そして私は完全に我を忘れていた。(479)

現在の探究犬は、「旋律」が空を漂い自分のところにやってきたときに認識した事柄を「すべて否定する」と言い、それを「迷妄」かもしれないと思う。それでも、「完全な忘我」については肯定的に見ている。生の根拠を問い続け、生の必然の意味を絶えず問い続けてきた探究犬が、思考停止ともいえる「忘我」を、限定つきであるにしても肯定していることに注意しよう。それは、当事者として内部から味わった共同性の体験なのである。

音楽犬たちは「存在の本質」を「歌」として表現していた。彼らは「存在の歌」を歌っていた。しかし、それは探究犬に向かってというわけではなく、一般の人々に向けてのものだった。

狩人犬もまた「存在の歌」を歌う。そしてそれは探究犬という特定の相手に向けてのものである。探究犬と狩人犬との共同体、それが二匹だけの最小のものにすぎなくても、共同体であることに変わりはない¹⁶⁾。探究犬は初めて共同性を体験したのである。

狩人犬から受け取った「旋律」がほとんど死にかけていた探究犬を蘇らせる。動けないほど弱っていたはずの探究犬が、「旋律に駆り立てられて、なんともすばらしい跳躍をしながら、飛ぶように走って」いる。狩人犬から出て空に浮かび、探究犬に届けられた「旋律」、それが探究犬にとっての「生きる糧」¹⁷⁾ となったのである。

食物研究の分野で偉大な業績を達成しようとした探究犬の断食実験は失敗に終わる。空からの食物が「歯をコツコツと叩く」ことはない。しかし、探究犬は自分が期待していたのとは別の方向から「生きる糧」を得たのである。「書くこと」において成果を求めているカフカは、まったく思いがけない方向から、すなわち、ミレナという「生」の側から「生きる糧」を得ることになったのである。

この声、その気高さ（Erhabenheit）の前では森も沈黙したこの声が、ただ私のためだけに。相変わらずここにとどまることをあえてし、汚れと血の中でいばってその音楽を聞いている私とは誰なのか。よろよろと私は立ち上がり、自分の体を見下ろした。「とても走れないな」と私はなおも思っていた。しかしすでに私は旋律に駆り立てられて、なんともすばらしい跳躍をしながら、飛ぶように走っていた。（479）

狩人犬の「気高い」歌を聞きながら、探究犬は、「相変わらずここにとどまることをあえてし、汚れと血の中でいばってその音楽を聞いている私とは誰なのか」と思う。「あえてし」や「いばって」という表現が示しているのは、「書くこと」を絶対視してきたカフカの、自身の不遜さへの反省である。ミレナの「存在の本質」に触れて、カフカは、自分の卑小さを思い知る。あれほど断食の場を離れることに強い抵抗を示していた探究犬が、「旋律に駆り立てられて、なんともすばらしい跳躍をしながら、飛ぶように走って」いる姿は、カフカが「書くこと」への執着を脱し、ほんの一瞬ではあるにせよ、生を体験している瞬間、生を享楽している瞬間を表現したものである。

探究犬と狩人犬との出会いの場面で示されているのは、人との関わりから離れ、「書くこと」に専心してきたカフカが、ミレナとの出会いによって愛を経験し、それが糧となって生きる力を再び獲得する過程である。探究犬が断食の場を離れる結果となったように、ミレナによってカフカは「書くこと」から「生きること」へと誘い出されたのである。

8. 音楽学の研究へ

探究犬は、狩人犬との体験を経て変わる。これまでは食物の研究一筋だったが、研究の範囲を音楽の領域にまで拡大するという。これはどういうことだろうか。すでに本論文の第3章で先取りして引用した一節を再掲する。

それにあの犬たち（＝音楽犬たち）においては、音楽がまず第一にもっとも目立ってはいたが、私には彼らの沈黙の本質（ihr verschwiegenes Wesen）の方が音楽より重要に思わ

れた。彼らのすさまじい音楽に似たものはほかにはまったく存在しないかもしれず、無視することもできたが、彼らの本質は、私は当時からどこにでもいるどんな犬の中にも見つけた。犬たちの本質に入り込むには、食物の研究がもっとも適切であり、回り道なしに目標に通じていると私には思われたのだった。ひょっとしたら私は間違っていたかもしれない。二つの学問の境界領域はもちろん当時から私の疑念を喚び起こしていた。それは食物を呼び降ろす歌についての教えである。(481)

当時の探究犬は、音楽犬たちの「音楽」よりはむしろ、「沈黙の本質」のほうを重視した。「沈黙の本質」とは、本論において「存在の本質」と呼んできたものであり、カフカの言葉で言えば、「不壊なるもの」のことである。それはポジティブなものである。しかし、犬たちは「沈黙」している。犬たちの内部にある「不壊なるもの」は互いにコミュニケーションし合うことなく、それぞれの心の奥深くにしまい込まれている。犬族は「沈黙の要塞」であり、自分たちの孤独に沈潜している。このような認識から、探究犬は、「犬たちの本質」に入り込もうとして食物研究に携わることにした。食物探究とは、「生きる糧」、「不壊なるもの」を求める研究である。犬たちの孤独に触れて、生きることの意味を探したのである。だがここに至って探究犬は、「ひょっとしたら私は間違っていたかもしれない」という。それは探究犬が生きることの意味の探究に没頭するあまり、自ら孤独にとらわれてしまったからである。狩人犬との体験を経て、探究犬は音楽犬体験を再度振り返る。そして、音楽犬たちのパフォーマンスに見られた「沈黙の本質」とは別の側面、「音楽」の側面に注意を向け直すのである。

「音楽」の側面とは何か。それは一つの理想的共同体が持つ一体性のことである。この観点から音楽犬たちの集団的パフォーマンスを振り返ってみよう。音楽犬たちは、「互いに励まし合い (befeuern)、難しいところを注意し合い、失敗しないように気をつけ合っている」(431)。「すばらしい安定性」を示している他の六匹の「偉大な名人たち」(428)と比べると、最後尾の「いちばん小さな犬」(431)は、「まだ少しおぼつかなく……いわば旋律の流れからは時折はずれる」(428)のだが、他の犬たちから「いちばん声をかけてもらっている」(431)。他の仲間の犬たちの「揺るぎのない拍子」(428)のために、不安定さもカバーされる。このように、音楽犬たちが形成しているのは、集団からはずれようとする者もまたみんなでサポートし合うことで成立している共同体なのであり、そしてこの共同体の一体性こそ、当時探究犬が聞き取った「うっとりする音楽」、つまり「本来の旋律」の正体である。

探究犬は狩人犬との関わりにおいて再び「旋律」を耳にする。それは探究犬が狩人犬との間に、音楽犬たちの一体感と同じ種類のものを感じたことを表している。「音楽」はこのように、沈黙や孤独とは正反対の方向、人とのつながりの方向をめざす。探究犬がこれから「食物を呼び降ろす歌」の研究に向かうのは、歌が共同性と関わり、それが食物を呼び降ろす、つまり、「生きる糧」をもたらすことになるからである。

探究犬による生き方の方向修正は、カフカの生き方の方向修正でもある。カフカは、人間存在の本質の問題ばかりでなく、それとの関連において、人とのつながりという側面にも目を向けていこうとしているのである。

むすび

以上、『探究』という物語が全体としてどのような流れになっているのかを見てきた。まとめてみよう。

物語は、今は老いた犬が自分のこれまでの人生を振り返るというものである。それは、自分はなぜ他の犬たちとは異なり、自分の属する共同体に居心地の悪さを感じるのか、なぜ異和感を感じるのかという問いから始まる。語り手の犬の異和感の始まりとなったのは、子供の頃の音楽犬たちとの出会いである。語り手の犬は、「虚無の空間」から音楽を紡ぎ出している音楽犬たち、つまり、既存の社会秩序から逸脱しつつも自分たちの「存在の本質」を表現している音楽犬たちに出会って大きな衝撃を受ける。彼らとの出会いによって語り手の犬は「真実」を感知し、「真実」の側から現存の世界を見るようになる。以来、語り手の犬は食物の探究を始める。それは、犬たちが何に支えられて生きているのかの探究、つまり、「生きる糧」を明らかにする探究であり、形骸化し硬直化した犬族の伝統や儀式的背後にある「真実」、すなわち「不壊なるもの」を求める探究である。探究犬は他の犬たちのように呪文を唱え、歌い、踊ることをやめ、ただ一人で断食実験まで行こうと失敗に終わる。期待していた食物、「生きる糧」は得られない。探究犬は、音楽犬たちがそのパフォーマンスによって実現していたような「存在の本質」を、自らの探究を通じて示すことはできない。しかし、まったく思いがけない方向から「生きる糧」がやってくる。絶望の中で血を吐いて気絶したとき、目の前に狩人犬が現れる。狩人犬は狩りをして生きるという自らのあり方を自明のものとして生きている。権力意志や性衝動を含む生を当然のこととして受け入れている。探究犬は狩人犬のそのような「自然さ」に強い感銘を受ける。音楽犬たちとは異なるが、狩人犬もまたその「存在の本質」を十全に表現していたからである。探究犬は狩人犬が「沈黙の歌」を歌うのを聞く。それは狩人犬が探究犬に向ける愛であり、探究犬にとっての「生きる糧」となるものである。狩人犬が寄せてくる愛情を、探究犬は素直に受け入れ、「忘我」に身を委ねる。それは探究犬にとってそれまで考慮してこなかった「共同性」の体験となる。それを契機として探究犬は食物学だけでなく、食物を呼び降ろす歌についての研究、音楽学の研究も始める。それは、探究犬が犬同士の「つながり」に目を向けるようになったということを示している。

カフカに即して見るならば、次のようになるだろう。カフカは東欧ユダヤのイディッシュ語劇とその芝居を演じる劇団員たちに触れて強烈な印象を受けた。彼らが社会から逸脱しつつも、その逸脱の孤独の中で心に響く芝居を演じながら生きていること、そのことに衝撃を受けたのである。劇団員たちは「存在の本質」を十全に展開し、美しい「旋律」を生み出していた。彼らを範とし、カフカもまた、「書くこと」によって自身の「本質」を示そうとする。人々を支えているように見える伝統や儀式的意味を問い、その虚偽性を露わにし、そのかなたに「真実」を見出そうとする。それは人々の孤独に迫り、何が人間にとって本当の「生きる糧」なのかを問う試みである。「書くこと」によって得られる歓びが、カフカにとっての「生きる糧」となるはずだった。しかし、世間の人々から離れ、孤独の中でどんなに「書くこと」に没頭しても、人々に「生きる糧」を開示する作品は書くことができない。自分の書いたものは何の意味もなかった、自分の人生は失敗に終わったというという絶望感に打ちひしがれているときに、カフカはミレナと出会う。ミレナとの関わりにおいて、カフカは愛を体験する。「書くこと」においてではなく、「生」の方向から「生きる糧」が得られるのである。ミレナとの関わりにおいて「共

同性」を体験したカフカは、イディッシュ語劇が実現していた「共同性」を思い出す。こうしてカフカは、人とのつながりという面に目を向けるようになる。

このように、この物語は寓話形式の自伝なのであり、カフカは探究犬に自分を仮託して、自分のこれまでの人生を振り返っているのである。この物語が全体として問うているのは、自分の生き方はこれでよかったのか、どこか間違ったところはなかったのかということである。他の自伝的短篇と同じく、カフカは「書くこと」で自分の人生の方向を見定めようとしている。そしてこの物語を書く最大の動機となっているのは、ミレナとの関係を総括することである。ミレナが自分の人生に何をもたらしたのかを自分自身に明らかにするために、これまでの人生をその初期から振り返っているのである。

ミレナとの別れの後に書かれた自伝的短篇としては、『探究』の先に書かれた『断食芸人』がある。そこでは、カフカの分身は断食芸人であり、ミレナは豹としてイメージされている。『断食芸人』と『探究』にはどのような違いがあるだろうか。

『断食芸人』では、断食芸人が死んだ後、断食芸人が入っていた檻に豹が入れられる。同じ檻に入れられることで、断食芸人と豹という二つの生のあり方が対照的に提示されている。断食芸人は誰からも見向きもされず、やせさらばえて死んでいくが、最後まで断食を続ける。一方、豹はその強烈な生命力によって観衆を魅了する。生否定的な断食芸人と生肯定的な豹がくっきりと対照される。読者は豹の輝かしい生命力に打たれるが、作者であるカフカ自身はむしろ、ひっそりと死んでいく断食芸人に自分の今後の生き方を確認している。そのことは、「しかし光の消えた彼の目にはなおも、さらに断食を続けていくんだという信念、もはや誇らしげではなかったが、固い信念が浮かんでいた」¹⁸⁾ という一文に明らかである。カフカは『断食芸人』を書くことで、自分の生き方とミレナの生き方は決して交わることはない、誰にも注目されなくても、あくまで「書くこと」を続けて行くのが自分の生き方であり、それをこれからもずっと続けていくのだということを再確認したのである。カフカはカフカの、ミレナはミレナの生を生きる、つまり、『断食芸人』はカフカにとってミレナとの訣別の物語でもあった¹⁹⁾。

では『探究』はどうなっているだろうか。『断食芸人』では断食芸人と豹が互いに会うことがないが、『探究』ではカフカの分身である探究犬とミレナの分身である狩人犬は互いに関わりを持つ。そしてそれによって探究犬は大きく変わる。それまで自分が続けてきた「問うこと」を中断すること、生をそのまま受け入れ、それに身を委ねてみることに、人とのつながりに目を向けることの重要性を認識する。最終的に探究犬は断食を放棄する。つまり、カフカは「書くこと」から「生きること」へと舵を切る所以であり、『断食芸人』とは正反対の結論となっている。

カフカが生との距離を縮めていることは、それぞれの物語における主人公の相手役である豹と狩人犬のイメージの違いとしても表れている。豹は猛獣であり、人間である断食芸人とは種を異にする。生命力にあふれ、自由を発散するといえ獲物を引き裂く凶暴な牙を持つ存在でもある。ところが、狩人犬は探究犬と同じ種である。狩人として他の生き物の肉によって生きてはいるが、野獣のような凶暴性はない。その代わりに性的な積極性が顕著である。全体的に、豹と比べればずっといぶんと和らげられ、人間化されていることがわかる。豹よりもいっそうミレナに近い存在へと具体化されていると言えよう。

『断食芸人』が「書くこと」への決意を強く打ち出しているのに対して、『探究』は生に身を委ねてみることも必要であるという認識を結論としている。『断食芸人』が書かれたのが1922年5月、そして『探究』は同じ年の9月から10月にかけて執筆された。わずか数ヵ月しか経

っていないのに、方向は逆転している。この変化はどうして起こったのだろうか。

1922 年の 5 月、ミレナは病気を見舞うためにカフカを訪れた。カフカは、これが彼女との最後の顔合わせになると思ったのだろう、日記に、「M（＝ミレナ）がここにいた。もう来ることはないのだ」²⁰⁾と書いている。『断食芸人』が書かれたのはその直後である。ミレナと再会したことでカフカは動揺した。それゆえあらためて、彼女との別れが必然であることを得心し、また自分の生き方を確認する必要があった。「書くこと」こそが自分の生きる方向であり、それはミレナとは交差することのない道なのだという自分を自分自身に納得させることが求められた。それが、『断食芸人』の終わりの場面となっていると考えられる。

それに対して『探究』が書かれたのは、9 月から 10 月にかけてであり、最後にミレナと会ってから時間が経っている。時間が空いたことが、ミレナとの別れの傷を癒し、ゆっくりと彼女との関わりの意味を探る余裕をカフカに与えたと考えられる²¹⁾。もう一度冷静に、ミレナ体験を自分の人生に位置づけてみようとしたのである。そしてこの長い物語を書くことで、イディッシュ語劇体験とミレナ体験の共通性が発見され、「生」が新たな意義をもってカフカの前に立ち現れてきたのである。

ここに至って、なぜこの物語が未完のままに中断したのかも明らかになる。結論が得られたからである。後はただ、「家を賛嘆してみたり、花輪で飾ってみたりせずに、その中に入って住むこと」、つまり、「生きること」を実行することだけなのである。カフカは「書くこと」から「生きること」へと大きく方向転換する。そして、「生きること」の試行を死ぬまで続けていくことになる。

『探究』執筆から一ヶ月後の 1922 年 11 月末、カフカはブロートに宛てて、自分の死後、すでに出版された作品と『断食芸人』を除いて、すべて焼却するように指示する。翌 1923 年には、パレスチナへの移住を計画し、先に移住していた友人のフーゴー・ベルクマンと会っている。結局、ブロートに宛てた手紙は出されず、パレスチナ移住も最終的に断念されるが、同年 7 月に知り合ったユダヤ人女性ドーラ・ディアマンとは、9 月末からベルリンで一緒に暮らすようになる。不満を抱きながらも決して離れることのなかったブラハを去り、激しい仲違いにもかかわらず、ほぼずっと同居し続けてきた両親の家を出て、それまで延々とためらい続けてきた女性との同棲をあっさり敢行した。人生の終盤になってカフカは、それまでの優柔不断さからは想像もできないような行動を次々に取ったのである。

このような体験を経て、1924 年、カフカは最後の作品『歌姫ヨゼフィーネあるいはねずみ族』を書く。そこでは、カフカが生涯にわたってその間で揺れ動いてきた「書くこと」と「生きること」の宥和がめざされ、芸術と生の関わりの意味が示されることになる。

注

- 1) ディエゲーシスとミメーシスについてはジェラルド・ジュネット（花輪光・和泉涼一訳）『物語のディスクール』水声社、2004、第IV章を参照。
- 2) Robertson, a. a. O., S. 359, Alt, a. a. O., S. 658.
- 3) 拙論「カフカの『ある犬の探究』——歌う犬とミレナ——」（『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第37巻、第1号、2015、43-58頁）参照。
- 4) Kafka, *Drucke zu Lebzeiten*, a. a. O., S. 349.

- 5) 拙論『変身』——生の権力性——(立花健吾・佐々木博康編著『カフカ初期作品論集』同学社, 2008, 277-309 頁) の 297 頁および Heller, Paul: *Franz Kafka. Wissenschaft und Wissenschaftskritik*. Tübingen: Stauffenburg Verlag, 1989 の第 V 章 'Kafkas Kritik des Sozialdarwinismus' (S. 155-190) 参照。
- 6) 『変身』の末尾におけるグレーテの姿は、権力性と性的な面の両者を含んだ生を肯定的なイメージで表現している。拙論『変身』——生の権力性——, 別掲, 306 頁以下参照。
- 7) 拙論「カフカとミレナの関わり——ウィーンとグミュントで起こったこと——」(『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第 36 巻, 第 2 号, 2014, 119-133 頁)。
- 8) Buber-Neumann, Margarete: *Milena. Kafkas Freundin*. 4. Aufl., München: Langen Müller, 2000, S. 51.
- 9) Buber-Neumann, a. a. O., S. 22.
- 10) Buber-Neumann, a. a. O., S. 98.
- 11) Buber-Neumann, a. a. O., S. 157.
- 12) Kafka, Franz: *Briefe an Milena*. Hrsg. v. Jürgen Born u. Michael Müller, Frankfurt a. M.: Fischer, 2011, S. 104.
- 13) Kafka, Franz: *Briefe 1918-1920*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Frankfurt a. M.: Fischer, 2013, S. 277f.
- 14) Kafka, Franz: *Briefe an Milena*. Hrsg. v. Willy Haas, Frankfurt a. M.: Fischer, 1975, S. 275f.
- 15) ここで思い出すのは, 1904 年 8 月 28 日に, 21 歳のカフカがプロートに宛てて書いた手紙の文章である。夏の日々のさまざまな印象や体験を散文詩のように連ねて書いている中に, 次のような一節がある。「別の日, 短い昼寝の後で目を開け, まだ放心状態でいるとき, 母が自然な調子でバルコニーから下に向かってたずねるのが聞こえた。『何をなさっているの?』庭から一人の女性が答えた。『緑の中でおやつを食べていますの。』そのとき僕は, 人々が生を担っているその堅固さ (Festigkeit) に驚嘆した。」(Kafka, Franz: *Briefe 1900-1912*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Frankfurt a. M.: Fischer, 1999, S. 40) ——カフカの母親と女性の会話はごく普通の, 日常的で何気ないもので, 驚くべきことは何もないように思われる。しかしカフカは, この会話を聞いて「人々が生を担っているその堅固さ」に驚嘆したという。驚嘆したのは, カフカがそのような自然さから疎外されているからである。この女性たちが身につけている自然さは, ミレナの自然さと通じるものがある。ただミレナの場合, カフカは, この女性たちの自然さ以上のもの, 彼女自身の生き方の根底から放出される強烈な自然さ——本論文での言葉を使えば, 「存在の本質」の表出——を感じたのだと思われる。なお, 上の一節は, 『ある戦いの記述』A 稿に取り入れられている。(NSF I, S. 91f.)
- 16) 『変身』のグレゴールもまた, グレーテと二人だけの共同体を求める。しかし, 『変身』においてはそれは実現することはなかった。拙論「グレーテの権力性と『未知の糧』——カフカ『変身』試論(2)——」(『大分大学教育学部研究紀要』第 19 巻, 第 1 号, 1997, 39-49 頁), 47 頁参照。
- 17) つまり, 狩人犬の「旋律」は「未知の糧」であったと言える。「未知の糧」とは「生きる歓び」のことである。これについては, 拙論「グレーテの権力性と『未知の糧』——カフカ『変身』試論(2)——」, 別掲を参照のこと。
- 18) Kafka, *Drucke zu Lebzeiten*, a. a. O., S. 349.
- 19) これについては, 拙論『断食芸人』——書く人として生きる——(上江憲治・野口広明編著『カフカ後期作品論集』同学社, 2016, 77-108 頁) を参照のこと。
- 20) 1922 年 5 月 8 日の日記。(Kafka: *Tagebücher*, a. a. O., S. 919)
- 21) この余裕のありなしが『断食芸人』と『探究』の大きな相違となっている。それは物語が扱っている時間的範囲の違いとも関係している。『断食芸人』では主人公の人生の後半が扱われるだけであるのに対して, 『探究』では人生全体を見わたしたの回顧となっている。『断食芸人』では, カフカは自分はこれからどう生きていったらよいのかを性急に突き詰めようとしている。それに対して『探究』では, 生涯の初めに戻って, 自分はなぜこういう生き方しかできなかったのかを

じっくりと振り返っている。また、語り手の側の余裕も大きく異なっている。『断食芸人』は三人称の物語であり、語り手が断食芸人の人生を示すのであるが、この語り手は断食芸人に肩入れしており、断食芸人のこのような生き方をどう思うかと読者に強く評価を迫ってくところがある。それに対して『探究』は、今は老犬となった一人称の語り手がこれまでの自分の人生を語る形式となっている。この語り手は、長い精神的なさすらいの果てに、片隅においてであるにせよ、共同体の中にとりあえず自分の居場所を見出した、安定した存在である。今では周囲の犬たちにそれなりに受け入れられており、自分の現状を肯定的に見ている。そのため、読者も安心して語り手についていくことができる。ただ、このような語り手の余裕は、話がしばしば脱線し、物語が冗長で散漫な印象を与えることにもつながっている。『断食芸人』の文体が緊迫感にあふれ、切羽詰まった感じがあるのとは対照的である。

Kafkas *Forschungen eines Hundes* (4)

— Die Begegnung mit dem Jägerhund und danach —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

In der vorliegenden Arbeit habe ich zweierlei zu klären versucht. Einmal wie die Begegnung des Forscherhunds mit dem Jägerhund zu verstehen ist, zum anderen warum sich der ausschließlich mit Nahrungswissenschaft befasste Forscherhund nach diesem Treffen der Musikwissenschaft zuwendet.

Der Forscherhund steht für Kafka, der Jägerhund für seine Freundin Milena Jesenská. Das Gespräch der beiden Hunde ist eine Metapher auf deren Liebesbeziehung. Der asoziale Einzelgänger Kafka erfährt die Liebe und schöpft neue Lebenskraft daraus.

Nicht was die Menschen trennt und unterscheidet, ist wichtig, sondern was sie verbindet. Zum Ausdruck kommt diese für Forscherhund wie für Kafka neue Einsicht, wenn Ersterer durch die Musik, Letzterer durch die Liebe aufgerüttelt wird und beide ihre Lebensführung ändern.

【Key words】 Milena, Lied, der Wille zur Macht, Liebe, Musik